人食いチンパンジー

捕獲され貪り喰われる美女達

作者　大黒達也

『人食いチンパンジー』

一、あらすじ

四人のトップグラビアアイドルが、東アフリカ、タンザニアのジャングル奥深くへとグラビア撮影に向かう。彼女達を待ち受けていたものは、前人未到のジャングルと人食いチンパンジーの群れであった。凶暴な野生のチンパンジーに犯され、生きたまま貪り喰われる美女達。

二、登場人物

桑田エリ

日本のトップグラビアアイドル。百七十センチの身長に、誰もが認める美貌と豊かな乳房と白人女も及ばぬような美しいヒップラインの持ち主

安田美奈

日本のトップグラビアアイドル。身長百六十五センチ。類稀な美貌と高い知能の持ち主。現実主義者であり、男も女も愛せるバイセクシャル。

桜田真由

日本のトップグラビアアイドル。身長百六十八センチ。知的な美貌と美しいプロポーションの持ち主。性格はおっとりとしている。

香田里奈

日本のトップグラビアアイドル。身長百七十センチ。ハーフを思わせる美貌と美しい肢体の持ち主。性格は、少しオッチョコチョイなところがあるキュートな女性。

アキラ・シンプソン

米国人を父に持つ日系人であり、元海兵隊所属。身長百八十センチ以上の長身で、米国海兵隊で鍛えられた屈強な肉体の持ち主。性格は陽気で、ハンサムの部類に入る。

三、本編

プロローグ

中央アフリカ東部に位置するタンザニア北部のタンガニーカ東岸に流入するマラガラシ川を、一隻の長さ三十メートル以上はある豪華クルーザが時速十数キロで航行していた。

船上には小型プールが造られ、超ビキニ姿の若い女達が、黄色い声を発しながら光り輝く水面で水飛沫を上げていた。彼女達の姿をプールサイドからひとりの若い男が、業務用のビデオカメラで撮影していた。

すぐ近くに置かれたテーブルでは、海水パンツ姿の男達二人が、女達の姿に鼻の下を伸ばしながら、冷たく冷やしたビールを大ジョッキで飲んでいた。

ひとりは白髪交じりの長髪で、気障なサングラスをかけた痩せ型の中年男であった。もうひとりは、三十代前半ぐらいに見え、筋骨逞しく短い黒髪にブルーの瞳を持つ男であった。

「アキラ。どうだ？日本の女は美しいだろう？」

痩せ型の中年男が、黒髪にブルーの瞳を持つ男に話しかけた。

「そうだな。肌がきれいだ。それにスタイルもいいな」

アキラと呼ばれた男は、空になったジョッキをテーブルに置いた。

「何しろトップグラビアアイドルだからな。顔は言うことないし、スタイルも白人女に引けをとらない。どの娘がタイプだ？」

中年男は、アキラという名の男に顔を近付けながら尋ねた。サングラス奥の目が笑っている。

「皆可愛いが、エリが好みだ。加藤さんは誰が好みなの？」

「エリか。彼女は一番の売れ子だよ。俺は美奈が可愛いと思う」

加藤という名の中年男が、サングラスを外し、手の平で強烈な日差しを避けながら、女達の姿を舐めるように見詰めながら言った。

「ねえ。そんなところでヒソヒソ話なんて、い・や・ら・し・いわよ」

真っ赤なビキニを身につけたエリが、満面の笑みを浮かべながら、二人に近付いてきた。二人の手を取り、プールの方に引っ張った。ふたりの背後に回った美奈が、体当たりをかませた。

四人は大きな水飛沫をあげながら、プールに飛び込んだ。四人の男女は強烈な日差しを浴びながら、奇声を発し、大げさに笑い、手足を絡ませた。

「ゲームをしないか？」

水遊びに飽きた加藤がプールから上がった。
「どんなゲーム？」
エリは興味を抱いたようだ。加藤がエリの手を引いてプールから引き上げた。
「アキラ。船長に少しの間、船を止めるように行ってくれ」

五分後、デッキには四人の女達と加藤にアキラが立ち、ゆったりと流れる水面を見詰めていた。加藤がセカンドバックから、一挺の黒光りする拳銃を取り出した。
「三五七パイソンだ。いい銃だよ」
加藤は生粋のガンマニアだった。日本では合法的に所持が不可能な拳銃を渡航の際、密かに入手していた。
「拳銃なんて、違法じゃないの？」
「ここはジャングルのど真ん中だよ。うるさい事言わないの。アキラ、ビール瓶を上流に向けて投げてくれ」
「いいよ」
アキラがビール瓶を三十メートルくらい上流に放り投げた。加藤がパイソン四インチマグナムを構えた。

十メートルくらいに近付いたビンに狙いをつけた。耳を劈くような銃声がして、ビンの近くに水飛沫が上がった。

「何だ。当たらないじゃない」

美奈が馬鹿にしたように言った。

「撃つのは初めてなんだ。ハワイに行ったときに機会を逃してね」

「貸しくれ」

アキラがパイソンを借り受け、一瞬狙いを付けて引き金を引いた。水面を漂っていたビンが粉々になった。

「カッコいい！」

エリがアキラの背中に抱きついた。

「私にも撃たせて」

美奈がアキラから銃を借り、両手で構え水面に向けて引き金を引き絞った。轟音が響き渡り、美奈はその場に尻餅をついた。

「玩具じゃないんだよ」

加藤が美奈からパイソンを取り上げ、抱き起こした。

「ゲームって、どうするの？」

エリが加藤に尋ねた。

「皆で射撃の腕を競うんだ。勝った者は誰でも好きな相手にキスをするんだ。でも止めておくよ。アキラが勝つに決まっている」
「アキラだったら、いつでもキスしちゃうわ」
エリが言ってから、俯いて頬を赤らめた。
「そうだよな。二枚目が羨ましいよ。まったく」
「飲み直しましょうよ」
アキラが加藤の肩を軽く叩いた。

その豪華クルーザに乗っていたのは、日本のトップグラビアイドル四人と、有名出版社の社員達に彼らのガイド役を勤める男達であった。
グラビアイドルのメンバーは、トップアイドルの桑田エリを筆頭に安田美奈、桜田真由、香田里奈の四名という、そうそうたるメンバーであった。エリは、雪のように白い美肌の持ち主であり、百七十センチの身長に、豊かな乳房と白人女も及ばぬような美しいヒッププラインの持ち主であった。
他の四名もエリに劣らぬほどの美貌とスタイルの持ち主だった。

出版社の社員は、企画部長の加藤健太に撮影担当の大杉寮、音声担当の高杉太一、唯一の女性スタッフである前原香織の四名であった。香織は入社一年目の新人で、スタッフ達の雑用係をしていた。度の強い分厚いレンズの黒縁メガネをしていて、化粧気もなく、皆から女扱いはされていなかった。いつも仕事着と言える擦り切れたジーンズにTシャツ姿であり、手足は長くスタイルは良かった。

乗組員は、ロバート・ストーンとアキラ・シンプソンに、現地で雇われた三人のタンザニア人達であった。ロバートが船長兼コックであり、アキラはガイド兼用心棒役であった。

ロバートは、クルーザのオーナーである船舶会社からの派遣スタッフであり、ほとんど口をきかない寡黙な中年男であった。フランス料理の腕は一級品であった。

一方アキラは、米国人を父に持つ日系人であり、元海兵隊所属で銃器の扱いには長けているとのことで

あった。船舶会社の正社員ではなく、臨時社員として雇われていた。普段は勝手気侭な世界旅行をしているということだ。

身長百八十センチ以上の長身で、米国海兵隊で鍛えられた屈強な肉体を有していた。性格は陽気で、ハンサムの部類に入るであろう。

一行は、ジャングル奥地にある前人未踏の秘境を目指していた。大滝が造る瀑布や密林の中で、フルヌードの撮影を計画していた。業界トップの美女達がフルヌードを披露することは、センセーショナルな話題を呼ぶであろう。

最近業績が落ち込んでいる雑誌の大幅な売り上げ増が予想された。そういう訳で彼女達には莫大な報酬が約束されていた。撮影費用もふんだんに用意された。プール付きの豪華クルーザに高級ワインやキャビア・フォアグラなどの高級食材も荷積みされていた。

彼女達には狭いながらも、バストイレ付きの個室が与えられていた。出版社スタッフの居室は一室のみで、狭い室内に男三人が雑魚寝の状態だった。雑用係の香

織は操舵室に寝泊りした。
ロバートとアキラは二人で、残りの一室を使い、現地人の乗組員は船上でビニールシートに包まり夜露を凌いだ。

クルーザは、ゆっくりとりした速度でジャングルの奥地へと向かっていた。
川幅は徐々に狭くなっていく。見渡す限り鬱蒼とした熱帯雨林のジャングルばかりだった。
日中、女達はグラビア撮影やプールサイドで豪華な食事を楽しんだ。ガイド兼用心棒役のアキラは必ず、彼女達に呼ばれた。アキラは女達を魅了するだけの引き締まった筋骨逞しい肉体と、彫りの深い整った顔立ちにブルーの瞳を持っていたからだ。
アキラは彼女達に世界中で経験してきたことを、ユーモアを交えながら聞かせた。彼女達は、アキラの巧みな話術と、容姿にうっとりとした表情で聞き入っていた。エリは特に熱心だった。彼の隣に座り、むき出しの逞しい太腿を触ったり、息がかかるほど顔を近付けたりした。

周りの女達は、時よりふたりの様子を見ながら、困惑した表情を浮かべた。

二ヶ月間という長期に渡る撮影旅行は、彼女達にとって退屈極まりないものになってきた。楽しみといえば、たまにアキラが作るイタリア料理や、アキラそのものだった。アキラにはイタリア料理の才能もあった。

比較的仲が良かった筈の女達に不協和音が響き始めた。

その夜、エリの部屋に他の女達が訪れた。早速、里奈が持ってきた三脚を部屋の隅に立て、ビデオカメラを取り付けた。

「こんな夜遅くに何の用なの？そのカメラは何？」

エリは女達の只ならぬ様子に、少し怯えていた。

「あんたに話があるのよ」

美奈が、ゆっくりとエリに近付いた。他の三人も美奈に続いた。

「何よ。そんなに怖い顔をして」

エリは、バスローブの胸元を手で掴んだ。肩が僅かに震えている。

「あんた。アキラと寝たでしょう？」
美奈は冷たい笑みを浮かべながら、エリの瞳を覗き込んできた。
「美奈ちゃん。何言っているの。そんな訳ないじゃない！」
「独り占めにするつもりね」
「だから、何でもないんだって！」
いつの間にか、三人の女達がエリの回りを取り囲んでいた。
「白状しないと痛い目を見るわよ」
「……」
「あんた。女に犯られたことは無いでしょう？」
美奈がエリの腰を両手で押さえ込むようにして、顔を近付けた。
「何言っているの？」
エリは顔を背けた。
「女にはね。女の弱点が痛いほどわかるのよ。どこが感じるかね？」
美奈の手が、バスローブ越しにエリの尻を撫で回した。様子を見ていた女達の顔に薄笑いが浮かんでいた。

「出て行って……」

叫びだそうとするエリの口に美奈が手を当てた。

「何怖がっているのよ。初めてじゃないんでしょう？私ね。本当は男より女の方が好きなのよ。随分前からアンタを狙っていたんだ。それにこっちにはカメラもあるんだ。一部始終を録画してあげるね。口封じのためだよ」

美奈は、エリの頬を舐めながら、バスローブの隙間から手を差し込んで、豊かな乳房を鷲掴みにした。

「……」

エリは嗚咽に咽びながらも、美奈から逃れようともがきだした。

「ベッドの寝かせるのを手伝ってちょうだい」

周りで見ていた女達に命令した。何本もの手がエリの身体に纏わり付いた。次の瞬間エリはベッドの上に仰向けの姿勢で横たえられていた。

「真由。エリの口をタオルで縛って。里奈は両手を押さえていてね」

女達が一斉に動き出した。大勢に押さえつけられては、為す術がなかった。

「さあ、ご開帳の時間よ。たっぷりと楽しませてあげるわね」

美奈は上擦った声で言いながら、ベッドの上で大の字に押さえつけられているエリのバスローブに手をかけた。次の瞬間、雪のように白くシミひとつない裸体が露にされた。寝ていても崩れない乳房にヒップラインがこの世のものとは思えぬほどに美しかった。生唾を呑込む音が周りから聞こえてきた。

「あら、きれいな身体ね。女の私が見ても惚れ惚れするくらいよ」

美奈の欲情に濡れた視線が、乳房から柔らかそうな腹部へと移動し、最後には股間の陰影に釘付けとなった。股を大きく割られているので、サーモンピンク色の割目がむき出しにされていた。

美奈は、おもむろに乳房に喰い付き音を立てて吸った。エリの大きな瞳から大粒の涙が流れ落ちた。暫く乳房を舐め回した後で、柔らかい腹部を甘噛みしてみた。エリの股の間に座り、両手で乳首を触りながら、ゆっくりと下腹部に顔を押し当て、クリトリスに吸い付き、舌先で舐め回した。エリの裸身がビクンと揺れ

動いた。

「もう感じているのね？お姉さんがもってよくしてあげるわよ。うつ伏せにするのを手伝って」

周りの女達が一斉に動き、エリの裸身をひっくり返した。盛り上がった白くてむき卵のような尻が皆の視線を貫いた。生唾を呑込む音が聞こえた。

「真由ちゃん。貴女、他人のアヌスを見たことはある？」

美奈は隣で、エリの尻を食い入るように見詰めていた真由に尋ねた。

「いいえ。無いわ」

上擦った真由の声が聞こえてきた。

「舐めてみる？」

「……」

真由は少しの間、美奈の方を見詰め、それからゆっくりと大きく頷いた。

「エリ。聞いたでしょう？真由ちゃんが、お前のアヌスを舐めてくれるんだって」

それを聞いたエリの裸身が、動き出そうとしてもがいた。手足を女達に掴まれているので、身動きは取れ

ない。タオルで塞がれた口から、嗚咽が漏れていた。真由の瞳が淫らな光を帯び始めた。目の前の豊かな白い尻の両手を添え、左右に押し開いた。きれいなサーモンピンク色のアヌスが割目の底に見えた。

「匂いを嗅いでみて」

美奈は徹底的にエリを甚振るつもりだ。

「いいわよ」

真由は尻の割目に顔を入れ、目を閉じて大きく息を吸い込んだ。白く盛り上がった尻がブルブルと震え、嗚咽が激しくなった。少しの間、アヌスの匂いを嗅ぎ続けた。顔を上げうっとりとした表情を浮かべた。

「どうだった。ウンチ臭かった？」

美奈が、淫らな笑みを浮かべながら、尋ねた。

「いいえ。石鹸のいい匂いがしたわよ。今度は舐めてみるね」

真由は期待に胸を時めかせながら、エリのアヌスに口をつけた。エリの白い背筋が仰け反った。女達に押し殺したような笑いが広がっていく。真由はエリの尻を押さえつけながら、激しい勢いでアヌスを吸い、舌を挿し込もうとした。

その後、女達による陵辱は朝まで延々と続けられた。エリは何度も逝かされ、最後には意識を失った。女達はそれでもエリを開放することは無かった。

人形のようなエリの膣やアヌスや乳房を舐め続けた。

翌朝、女達は、皆ビキニ姿になりデッキのプールサイドで遅い食事をとっていた。美奈はエリの隣に座り、時折、口移しでパンやサラダを食べさせていた。

「今夜も犯る？」

里奈が期待に目を輝かせて美奈の顔を見た。

「もちろんよ。旅の間も日本に帰ってからも、好きな時に犯してやるわ。こっちにはテープがあるんだから」

美奈は蒼白な顔をして押し黙っているエリの太腿を鷲掴みにした。

「女の人の身体があんなにいいとは思わなかったわ。私戻れなくなっちゃう」

真由が屈託の無い笑顔を浮かべながらミニトマト

を口に入れた。
「あのさ。今夜浣腸を試してみない？」
里奈が爪先をエリの股間に押し付けながら、皆の顔を見回した。エリは俯き肩を震わせていた。
「何、言ってるのよ。食事時よ」
「だって、言うじゃない。あれの姿を見られたら完全に言うなりよ」
「奴隷って言うわけ？いいわね。浣腸した後で、極太のペニバンでアヌスを犯してやろうか」
「そいでさ。一部始終を撮影して、あたし達に逆らったらネットに流すのはどうかな。この女、日本にいられなくなるね」
「ネットは世界中に公開されているのよ。死ぬしかないわね」
女達は、エリの肉体はおろか、精神まで貪ろうとしていた。テーブルの下では両側から美奈と真由が、エリの膣やアヌスに指を入れ、中をかき回していた。
「お日様の下で食事は美味しいだろう？お嬢さん達」
アキラが満面の笑みを浮かべてやってきた。
「そうね。大自然に囲まれて、最高の気分よ」

美奈は、周囲に広がるタンザニアの深いジャングルを見渡した。川幅は大分狭くなっていた。三十メートルといったところだ。

「エリちゃんは、どうしたの？顔色がすぐれないな」

アキラはエリの近くに立ち、横顔を見詰めた。エリは、力の無い笑顔を返した。

「長旅の疲れが出たのよ」

美奈が代わりに答えた。

「船旅は後、数時間で終わるよ」

「えっ。そうなの？確か予定では後、目的地まで二日ぐらいかかる筈だったけど」

美奈はアキラの顔を見詰めた。

「予定が変わったんだ。こっちの方も秘境中の秘境さ。数十メートルの落差がある瀑布や大密林地帯が広がっている」

アキラは何となく浮かない表情で答えた。

「何か問題でもあるの？」

美奈はアキラの表情を見逃さなかった。

「不安と言うほどでも無いが。そこはチンパンジーの生息地域なんだ」

「チンパンジーですって！動物園で芸をするのをよく見たよ」
里奈が会話に割り込んできた。
「芸をするのは、子供のチンパンジーさ。成獣にはとても凶暴な奴もいる」
「だって。こっちには銃もあるんでしょう？貴方が付いているし」
真由が不安げな表情を浮かべながら、会話に加わってきた。
「そうだな。何も心配することは無い。俺が君達を守る」
アキラは吸い込まれそうな満面の笑みを浮かべた。
「そうと決まったら、下船準備をしなくちゃ。行きましょう」
美奈がエリの手をとり立ち上がった。
女達はエリを取り囲むようにして、船室に向かって歩いていく。アキラは彼女達の後姿を食い入るように見詰めていた。ビキニからはみ出た尻が悩ましげに揺れ動いている。アキラは視線を外し、雲ひとつ無い澄み渡った青空を見上げた。大きな深呼吸をしてから、

深い溜息をついた。

エリの部屋では、ベッドに全裸のエリがうつ伏せに寝かされ、美奈が深い尻の割目に顔を入れてアヌスを舐っていた。エリは枕に顔を沈め、咽び泣いていた。

「美奈ちゃんも好きだね」

すぐ近くで真由が、覗き込むようにして見ていた。

「だって、もう時間が無いのよ。真由ちゃんだって、エリがウンチをするところ見たいでしょう？」

美奈が愛液に塗れた顔を上げた。

「見たいわよ。でも浣腸器なんて、持っているわけ？」

「大丈夫よ。エリ。ぼさっとしてないで立つんだよ」

四人の女達は、バスルームに移動した。美奈は空のバスタブにエリの上半身を落としこんだ。エリは茫然自失という状況で為すがままであった。盛り上がった白い尻が、女達の視線を釘付けにした。薄いチョコレートグレイ色のアヌスが見えた。美しいアヌスの周囲は無毛で、柔らかな恥毛が生えているヴァギナへと続いていた。再び、美奈がアヌスに口を付けて、舐り始めた。暫くそうしていた。

「ねえ、浣腸はまだなの？」

他の女達は痺れを切らしていた。

「浣腸するには、ここを十分に濡らさなくちゃね。もういいようね」

美奈が愛液に塗れた顔を上げ、淫らな笑みを浮かべた。

「里奈ちゃん。カメラの準備は大丈夫？」

「いつでもＯＫよ」

里奈は、カメラをエリの盛り上がった白い尻に向けた。

美奈は、シャワーのホースを手に取り、ヘッドの部分を外した。蛇口を回し湯の温度を調整してから、ホースの先をアヌスに捻じ込んだ。

それまで、じっとしていたエリの背筋が仰け反った。

「嫌！そんなことしないで」

絶叫し泣き喚いた。バスルームのドアは閉められていたので、外に悲鳴は漏れない。

美奈は少しの間、アヌスに湯を注ぎこんだ。ホースとアヌスの隙間から湯が溢れ出したのを見て、ホースを抜くと排泄物が勢いよく噴出した。

「グラビアイドルの浣腸シーンよ！」
「臭くない？」
「こんなきれいな顔していても、ウンチは臭いと言うことよ」
バスルーム内に女達の黄色い声が響き渡った。ホースによる浣腸は、排泄物が無くなるまで続けられた。女達は交代でエリのアヌスをホースと湯で犯し続けた。最後には、ベッドルームに戻り、寄って集ってペニスバンドでアヌスを貫いた。茫然自失のエリは、為すがままの状態だった。女達は残忍な笑みを浮かべながら、人形のような白い肉体を犯した。部屋には、女達の笑いに混じり、エリの尻に腰を打ち付ける音が響き、愛液の隠微な匂いが充満していた。

第一章　秘境

マラガラシ川の水面に夕日が映える頃、クルーザは、人口数百人という小さな集落についた。クルーザは今にも倒壊しそうな木製の桟橋に横付けされた。
ホットパンツにタンクトップ姿の素肌を露出した女達が上陸すると、村の子供達が満面の笑みを浮かべ

ながら、回りを取り囲んだ。口々に何かを言っていた。
少し離れた木陰には、村の若い男達がたむろして、女達の様子を食い入るように見詰めていた。彼らの物欲しげな視線は、女達の白い太腿や胸の膨らみに注がれていた。

「何て言っているの？」
子供達に取り囲まれ、困惑した表情の美奈が、近くを通りかかったアキラに尋ねた。
「こんなきれいな女の人は見たこと無いってさ。まるで天使のようだとも言っているよ」
アキラは美奈にウインクした。
「嘘でしょう？本当は何て言っているの？」
「携帯電話を見たいんだってさ」
「だって、ここ電波通じないんでしょう？」
美奈がバックから携帯電話を取り出すと、近くにいた少年がひったくるようにして、取り上げ満面の笑みを浮かべながら、手馴れた手つきで操作しだした。
周りにいた子供達が一斉にその少年を取り囲んだ。
少年は携帯電話のゲーム機能であるテトリスを始め

ていた。

「へえ。ゲームできるんだ」

美奈が少年の背後に立って、様子を眺めていた。

「さあさあ、お嬢さん達。今夜は村長宅に招待されているんだ。荷物を持って俺についてきてくれ」

アキラは少年から携帯電話を取り上げて、美奈に返した。エリは相変わらず、無表情で佇んでいた。美奈がエリの手を掴み、引き摺るようにしてアキラの後に続いた。少年少女達の輪が広がり、やがて何事も無かったように、それぞれの遊びに興じ始めた。木陰にいた男達は、無言で立ち上がり、女達から数十メートル離れて後に着いて来た。女達はお喋りに夢中で誰も男達に気がつかないでいた。

村長宅には、グラビアイドルの美奈達とアキラに企画部長の加藤が招待された。他の乗組員や撮影スタッフはクルーザに居残りだった。

村長宅といっても、今にも倒壊しそうな木造の平屋建てであった。部屋数も食堂と居間の他に寝室が三部屋あるだけだ。一応、バストイレはついていた。

内装は、日本人の趣味にはあわないだろう。村長が槍で仕留めたというライオンやヒョウのトロフィが壁にいくつも飾られていた。居間や食堂の床にはヒョウ皮の絨毯が敷き詰められていた。村長宅というだけあって、僻地にもかかわらず、テレビやステレオなどの電化製品も置かれていた。毎年、海外や地元から大勢の観光客や撮影スタッフが来ていて、彼らとの取引でかなりの収入を得ているとのことであった。

一行は広さ十畳ほどの食堂で、十人がけのテーブルに付き、五十代半ばと思われる村長とその妻に食事を振舞われることとなった。広いテーブルの上には、子豚の丸焼きや様々なフルーツが並べられていた。

丸々と肥太った村長の妻が、大鍋を抱えてやってきた。皆の皿にカレー風味の料理を盛り付けていく。すべての皿に料理が盛り付けられ宴会は始まった。

「この村にようこそ。こんなに美しい女性達がこの村を訪れるのは始めてのことだ。今宵は飲んで食べて、楽しいひと時を楽しみましょう」

村長が物静かな口調で挨拶を始めた。もちろん現地

語であり、アキラが手短に内容を皆に伝えた。
「この肉美味しいわね。何の肉なの？」
里奈が、皿に盛り付けられたカレー風味の料理に舌鼓を打った。
「何の肉なのですか？」
アキラが正面に座った村長の妻に現地語で尋ねた。
「チンパンジーの肉よ。それも若いメスの太腿肉なのよ。とても柔らかくて美味しいでしょう」
満面の笑みを浮かべながら、肉片に齧り付いた。
「そうですか」
「ねえ、アキラ何の肉なの？」
里奈が興味津々と言った顔で尋ねてきた。
「ただの鹿肉だって。何時間も煮込んだと言っている」
アキラは嘘をついた。チンパンジーの肉と知れば、女達はショックを受けるだろう。吐き出す者もいるかも知れない。食事の席で無礼は許されない。明日は、現地の男達を雇い入れなければならないし、食料や水の調達も必要だった。
すべて村長との交渉になるだろう。

「へえ。そうなんだ。後でいいから調理法を教えてくれない。それと、その鹿肉どこで売っているかもね」
「残念だけど、この鹿肉はどこにも売っていないんだ」
「そうなんだ。残念だな」
里奈はやっと諦めた。
村では、この辺りに紛れ込んでくるチンパンジーの狩が行われていた。現地人にとりチンパンジーが遺伝子的に、人間に最も近い動物であることなど、関係が無くただのご馳走というわけだった。

白髪混じりの短髪に、顔に深い皺が刻まれた村長は、無類の酒が好きらしく、アキラと現地語で二、三の会話をした後は、上機嫌にバドワイザーの缶を空にしていった。目の前に座り、女同士で歓談しながら、子豚の肉に喰い付くグラビアイドル達の豊かな胸を締まりの無い表情で見詰めていた。
一方、妻の方は、エリのことが気に入ったらしく、しきりに声をかけ、食事を勧めるが、現地語なのでまったく意味が通じず、困惑した表情を返すだけだった。

それでも、気分を害した様子も無く、みぶりてぶりを交えながら女達に話しかけていた。

アキラは、村長の相手をしながら時々、女達に話の内容を通訳していた。アキラの話しでは、妻の名はナヌといい、大の日本フアンということであった。

話の内容は特に重要なものではなく、女達が見たことも無いほど美しいとか。タンザニアの魅力は何かといったものだった。

宴会は村長が酔っ払い、テーブルの上に突っ伏した時点で終了した。ナヌが巨体を揺すらせながら、泥酔した夫を介抱して寝室に連れて行った。

ナヌはすぐに戻ってきた。アキラを呼び現地語で何かを伝えた。アキラは企画部長の加藤と美奈達に話の内容を伝えた。

「奥さんが言うには、エリちゃんと一緒に寝たいそうだ。他の人は、後ひとつ寝室があるから、そこで寝るか居間を使うように言っていた」

「どういうことだ？もしかして、あの女はレズか？」

加藤が小声で聞き返した。

「彼女が気に入ったらしい。断れば、ガイドも必要な

物資も提供しないと言っていた」
「ガイドがいなきゃ、カメラやその他大量の荷物を運べないぞ。それにまとまった食料も欲しい」
「いいんじゃない。エリもあのオバサンが気に入っていたみたいだから。いいでしょうエリ。あなたが拒否すれば、取材は台無しになるのよ」
美奈が会話に割り込んできた。美奈はエリの腕を掴み、部屋の隅に連れて行った。
「言うことを聞きなさい」
「嫌よ。そんなことさせないで」
「あんた、私の言うことが聞けないというの？」
美奈は、エリの顔を睨み付けた。エリの肩先がワナワナと震え始めた。
「美奈ちゃん。俺が何とかするから、エリちゃんを苛めないでくれよ」
アキラがふたりの間に割って入ろうとした。
「アキラは黙っていて。これは私達の問題なの」
美奈はアキラの顔を見上げ、きっぱりとした口調で言った。
「わかったよ。好きにするさ」

アキラは両手を挙げて、お手上げの格好をした。

「あのオバサンに言うとおりにすると伝えてちょうだい」

その後、村長の妻ナヌの指示で女達は、バスルームで汗を流した。タオルを巻いただけのエリが、美奈によってナヌに引き渡された。ナヌはすぐに、エリを伴い寝室に消えた。

残されたメンバーのうち、女達三人とアキラが残る一室に寝ることになり、企画部長の加藤はひとり居間に取り残された。加藤は、夕食で残った赤ワインのボトルをラッパ飲みしながら、居間のソファに横たわった。

一方、ナヌの寝室では、エリがタオルを外され、生まれたままの姿でナヌの前に立たされていた。ナヌは膝間付いてエリの盛り上がった白い尻を食い入るように見詰めていた。突然、現地語で何かを言ったかと思うと、エリをベッドの上に押し倒し、尻の割目に顔

を入れ、激しい勢いでアヌスを舐り始めた。
エリはナヌのことが恐ろしかった。身長は僅かにエリの方が高いが、体重は三倍くらいもあるだろう。丸々と太っていた。ナヌの厚ぼったい唇が、エリのアヌスを吸っていた。アヌスを吸われながら、乳房を揉みしだかれた。
ナヌは欲望のままにエリのアヌスを吸い続けていた。
エリは羞恥に泣き叫んだ。獣にも似た中年女に犯されているのだ。ナヌのザラザラとした舌が、アヌスをこじ開けようとしていた。乳房を揉んでいた手が股間に移動して、図太い指先を乾いた膣に突き入れられた。
「いや！」
エリが背筋を仰け反らせた。美尻がブルブルと震えていた。アヌスに満足したのか、今度は仰向けにされ、ヴァギナを、音を立てて舐られた。それは執拗な愛撫であった。腰を両手で掴まれ、クリトリスを舌先で転がされた。
エリがもがくほど、ナヌの瞳は怪しく輝いていく。
不意に股間から、これまで感じたことの無い快感が

湧き上がった。

「ああ……」

背筋を仰け反らせ、思わず喘ぎ声を上げていた。ナヌの激しい愛撫により快感が掘り起こされていた。エリは両手で顔を隠すようにして咽び泣いた。嗚咽に咽びながら、人生が、崩れ落ちていくのを感じていた。醜い中年女に抱かれ、快感に身悶えしているのだ。

その時、不意にナヌが愛撫を止めた。ナヌの背後にTVカメラを構えた美奈が立っていた。美奈は、一糸も纏わぬ全裸であった。気配を感じたナヌが振り向いた。美奈はカメラを床に置き、ナヌの前に立ち、ヴァギナがよく見えるように両手で押し開いた。サーモンピンク色のヴァギナがナヌの瞳を貫いた。

現地語で何かを呟きながら、美奈の尻を両手でかき寄せ、股間に齧り付いた。

美奈は白い歯を食い縛りながら、ナヌに膣を与えていた。

数分後、ベッドの上には、エリと美奈が四つん這いの姿で並べられ、交互にアヌスや膣を背後から舐られ

ていた。美奈はナヌにアヌスを吸われながらエリの唇を奪っていた。最後にふたりは、ナヌにより背後から極太のペニスバンドで膣やアヌスを貫かれた。

一方、アキラ達の部屋でも女ふたりとアキラとの乱交が行われていた。女達は男の肉体に飢えきっていた。男根をふたりで競い合うようにして舐め回し、吸いまくった。鍛え抜かれたアキラの肉体が、里奈と真由を魅了し尽した。

アキラは極限まで射精を我慢し、女達を堪能させた。

災難だったのは、企画部長の加藤だ。両側の部屋から隠微な喘ぎ声が、絶え間なく聞こえてくるのだ。寝るに寝られなかった。ソファの上で枕に顔を押し付けて我慢していた。

翌朝、撮影スタッフ一行は簡単な食事を済ませてから、奥地に向けて出発した。

村から荷物の運搬用に五人の屈強な男達を雇い入れていた。食料に水は十分であった。出発まで、村長

は昨夜の深酔いのため現れなかった。
男達の日当や食料などの資材調達の交渉は、すべて村長の妻であるナヌとアキラが行った。交渉は順調だった。ナヌは常に上機嫌だった。出発直前まで、エリと美奈を放さなかった。何かと理由を付けては、家に呼んだ。
エリと美奈は寝不足なのか、欠伸を絶やさなかった。

第二章　森の悪魔

ジャングルへと続く道は、意外なことに比較的歩きやすかった。密林を切り開くという訳では無く、幅一メートルほどの獣道を一列になり進んでいく。
先頭を行くのはアキラだ。肩には狩猟用の大型ライフルを担ぎ、右手には大振りの鉈を手にしていた。行く手を阻むツタを軽々と払いのけていく。
アキラのすぐ後ろには里奈と真由が続いた。ふたりは、ホットパンツにタンクトップといった服装で、化粧道具が入ったナップザックを背負っていた。女達は全員似たような軽装だった。ハーブを使用した特性の虫除けスプレーで害虫の防護をしていた。ふたりは何

かとアキラに話しかけていた。アキラも満更では無さそうで、ふたりのことを気使っていた。何となく昨夜の余韻が残っているようだった。

彼らの後ろには、ＴＶカメラや音声係などの撮影スタッフが続いた。貴重な資材を村人達には任せられないのか、自分達で運んでいた。唯一の女性スタッフである香織も重たい取材道具を背負い、全身汗にまみれながら、黙々と進んでいく。

深いジャングルの中に湿気が立ちこめ、三十度という温度が彼らの体力を急速に奪っていく。何度と無く足を止めて、濡れタオルで顔や首を拭った。

撮影スタッフの後ろには、エリと美奈が肩を寄り添うようにして歩いていた。美奈は歩きながら、しきりとエリの唇を求めた。エリは逆らわなかった。ホットパンツの隙間から手を入れて、ヴァギナやアヌスに指を入れたりした。

まったく為すがままだ。村長宅でナヌと美奈に犯されたときから、エリは従順になっていた。美奈の言いつけには絶対服従だった。

その様子を、背後から村の男達が暗い目付きで見ていた。ホットパンツから伸びる白い素足や形の良い尻が揺れ動く様子に視線が釘付けにされていた。

すぐ目の前で、極上の女達が、白くすべすべな太腿や、ホットパンツに包まれた尻をこれ見よがしと言った感じで見せ付けられて、動揺しない男はいないであろう。女達は村の男達など人間扱いしていなかった。それが態度に出ていた。

「御願い。少し休ませて」

三十分も歩かない内に、里奈がアキラに休憩を申し出た。

「仕方ないな。五分だけだよ」

アキラが皆を大木の木陰に集め、五分間の休憩を告げた。里奈がひとりで茂みに入ろうとした。

「どこに行くの？」

アキラが里奈の背中に声をかけた。里奈が振り向き、困ったような顔をした。

「あれに決まっているじゃない。そんなこと聞くなん

て里奈が可愛そうよ」

真由が呆れ顔でアキラの袖を引っ張った。

「なるほど、そういう訳か。里奈ちゃん。あんまり遠くに行っちゃ駄目だよ」

今度はアキラが照れくさそうに頭を掻いた。里奈はアキラに向かって可愛いい舌を出しながら、茂みの中に消えた。

茂みを抜け、すぐ近くにあった大木の根本で、里奈は立ち止まり、周囲を見渡した。誰も見ていないことを確認して、ホットパンツとビキニのパンティを脱いで、しゃがみ込んだ。すぐに小水が迸る音が聞こえてきた。

里奈は生き返る思いだった。強烈な尿意から開放され、脱力感さえ覚えていた。その時、不意に何かの気配を感じた。すぐ近くの茂みに黒い影が動くのを感じた。

「キャー！」

里奈は下半身をむき出しにしたまま立ち上がり、大きな叫び声を発した。

「どうした？里奈ちゃん。大丈夫か！」

アキラが駆けつけると、美しい尻を丸出しにした里奈が、立ち尽くしていた。
「どうしたんだ？」
「そこに何かがいるのよ」
里奈は震える声で言いながら茂みを指差した。アキラが持っていたライフル銃の銃口をその茂みに向けた。その時、遥か頭上の木々がざわめいた。黒く大きな影が凄まじい速度で移動していく様子が見えた。
「アキラ！」
里奈が叫びながら、アキラの胸に飛び込んだ。
「心配ないよ。行ってしまった」
「あれはいったい何なの？」
「たぶん。チンパンジーだと思う。君が用を足しに来た場所にたまたま、そいつがいたんだよ」
「おい。どうした？大丈夫か？」
企画部長の加藤が、慣れない手付きでライフル銃を構えながら、近づいてきた。里奈の尻を見て、咳払いをした。里奈はやっと気がついたのか、ホットパンツを引き上げた。残る全員も集まってきた。
「何が起きたの？」

美奈が里奈の肩を抱いて介抱しながら、アキラに尋ねた。
「チンパンジーと遭遇したらしい」
「あんた。チンパンジーにアレを見られたの？」
真由が、噴出しそうになるのを堪えながら、里奈のオデコを軽く突いた。
「危害を加えるつもりは無かったようだ」
「チンパンジーって凶暴なんでしょう？」
「普通、自分より大きな相手は襲わない。里奈ちゃんは結構長身だからね」
「わかったわ。これから用を足す場合、二人以上でするわ。いいわね。あなた達」
美奈が残る三人の女達の顔を見渡した。
「私は美奈ちゃんより、アキラの方がいいわ」
里奈が美奈から離れ、アキラに抱きついた。
「勝手にすれば」
美奈はプイと横を向いた。

アキラ達が立ち去った後で、里奈が小便をした場所に黒い影が、木々の合間から現れた。それは年老いた

一頭のチンパンジーであった。里奈の小便がかけられた草に鼻を突っ込み、深呼吸をしていた。まるで、匂いを楽しんでいるかのようにも見えた。

「やっと、着いたぞ。ここが目的地だ。これから野宿する場所を確保する」

先頭を歩いていたアキラが振り返り、片手を大きく上げて言った。

女達や撮影スタッフの視線がアキラの背後に向けられた。数十メートル先に落差数十メートルの滝が大量の水飛沫を上げていた。滝全体に西日が射し、まるで燃え上がる炎のように見えた。滝の周囲は深いジャングルに囲まれていた。

一同は暫し、呆然とその光景に魅入っていた。それは桃源郷にも似た世界だった。

滝のすぐ近くは、水飛沫が舞い、野営地としては不適に思われた。

「この辺にテントを張ろう。ここなら、撮影場所に近いし、川もすぐそこにあるから、水場としても問題ない」

野営地として選んだ場所は、周囲を大木に囲まれ、すぐ近くには、滝壺に通じている深さ三十センチ、幅五メートルくらいの清流が清らかな音を立てていた。

「こんな所で眠るなんて聞いていないわ」

美奈が、企画部長の加藤に詰め寄った。

「美奈ちゃん。ここは観光地じゃないんだよ。ホテルなんてある訳無いでしょう」

「だって、ここはアフリカのど真ん中でしょう？ライオンだっているんでしょう？」

美奈はさらに食い下がった。

「大丈夫だよ。キャンプの周りには一晩中、焚き火を絶やさないし、寝ずの番も付くんだ。猛獣が来たら、こいつで殺す」

アキラは美奈に大型の狩猟用ライフルを見せ付けた。巨象でも一撃で倒せる大口径ライフル銃だ。

「でも……」

「君がそんなに心配なら、特別な寝床を用意するよ」

アキラはそう言って、近くにいた村の男達に現地語で何かを伝えた。男達は大きく頷いてから、近くに生えていた太さ十センチほどの若木を斧で切り始めた。

三十分ほどで長さが五メートルほどに切り揃えられた丸太が数十本作られた。アキラはロープを掴み、すぐ近くに生えていた巨木に登り始めた。十メートルほど登ったところで、ロープを地面まで垂らした。村の男達が丸太をロープに巻きつけ、それをアキラが引き上げた。引き上げた丸太を太さ数十センチはある枝に縛り付けた。その行為を何度も繰り返した。

三十分ほどで、地上十メートルのところに、床が丸太で作られた八畳ほどの空間が造られた。その上に六人用テントが張られた。丸太で作った床の周囲には落下防止用のロープと木の枝で作った簡易的な策を張り巡らした。

アキラはそれだけではなく、その場所から数メートル離れた場所に、短くした丸太で一メートル四方の床を作り、真ん中に三十センチ四方の穴を空けた。

すべてをやり終えた後、下で休んでいた女達を、手製の人力エレベータで引き上げた。エレベータといってもロープの先に木の枝で作った椅子を縛りつけただけの簡素なものであり、上から引き上げねばならない。

「私、高所恐怖症なの」
里奈が丸太の床で四つん這いになり、下を恐る恐る見下ろしていた。十メートルと言えば、地上四階建てのビルに相当する。人間が最も恐怖を感じる距離だと言われている。
「周り中、枝や木の葉だらけで眺望はよくないけれど、ライオンなどの猛獣は防ぐことができるよ」
「アキラって天才なのね」
真由が、アキラに抱きついて耳元で囁くように言った。
「驚くにはまだ早いよ」
アキラは四人の女達を、太さ一メートルほどある枝伝いに、数メートル離れた広さ一メートルほどの空間に案内した。そこまでの通路にも落下防止用の策が作られていた。
「ここは何だと思う？」
「何かしら、真ん中に穴が空いているわね……もしかしてトイレ？」
里奈が、四つん這いになり、真ん中に作られた穴に手を差し入れた。

「当たりだよ。手洗いつきだ」
すぐ上の枝には、ポリタンクが吊るされており、中には水が満たされていた。
「ここでしたら、下から見えない？」
「大丈夫さ。見てご覧。木の葉で完全に見えなくなっているよ。それにこっち側にはテントを張らないから、安心して用を足せばいいさ」
「わかったわ。これなら安心して眠れそうね。それと貴方がここで私達をガードするなら、ここで寝てあげてもいいわよ」
「お安い御用さ」
それを聞いた里奈と真由の顔色がぱっと明るくなった。
「じゃあ。食事とするか」
「その前に、近くの小川で水浴びをしたいんだけど、大丈夫かしら」
「ああ、この辺りにワニはいないから、大丈夫だよ」
「当然、貴方が守ってくれるわね」
「俺も水浴びがしたかったところさ」

夕暮れ時、キャンプ地から十メートルくらい離れたところに流れる清流では、女達四人とアキラが全裸になり、汗を流していた。キャンプ地とは深い茂みで隔てられているので、スタッフ達の視線を気にすることは無い。はち切れんばかりの瑞々しい裸身が水面で戯れていた。四人ともグラビアイドルだけあってか、手足が長く均整が取れた素晴らしいプロポーションの持ち主だった。

彼女達の様子を近くの茂みから覗き込む者達がいた。荷物の運び役である村の男達だった。彼らは自分の股間をむき出しにして、扱いていた。瞳の奥には欲望の炎が見えた。

さらに彼らの他にも闇の中に、いくつかの小さな光が見え隠れしていた。

それは、体長が一メートル六十センチくらいある成獣のチンパンジー達であった。三頭のチンパンジーが川岸に腹ばいとなり、女達の様子を食い入るように見詰めていた。

岩でできた川底に座った里奈が歓声をあげながら、アキラの男根を掴んだ。アキラの顔を上目使いに見

ながら、口に頬張った。

「里奈ちゃんずるいわよ」

真由がアキラのアヌスに口を付けた。エリの身体を水で洗っていた美奈が、エリを川底で四つん這いさせ、尻の割目に顔を付けて、アヌスを舐り始めた。アキラも里奈を抱き上げ、空中で膣を貫いた。男女五人が、清流の中で、互を貪りあった。

彼らの様子を食い入るように見詰めていたチンパンジーの数は、いつの間にか数十頭に増えていた。数頭のチンパンジーが自分の男根を扱いていた。

アキラ達は性欲に集中するあまり、周囲の状況は目に入らなかった。

女達とアキラによる乱交は一時間近くも行われた。彼らは最後まで自分達を覗き見している村の男達やチンパンジーの存在に気がつかなかった。

キャンプに戻ると、撮影スタッフにより夕食の準備が進められていた。

赤々と燃え上がる焚き火により、大鍋が加熱されていた。缶詰のコーンスープを加熱していたのだ。スー

プの他には、村民から買い入れたナマズや名も知れぬ淡水魚を枝に刺して、直火で焼き上げていた。ハンゴウで米も炊いていた。

「私、パスタを食べたいわ」

里奈が、長さ一メートルくらいのナマズから立ち昇る煙を眺め、ボソリと呟いた。

「贅沢言わないでよ。ここはアフリカのど真ん中。秘境中の秘境だよ」

「私は、お刺身が食べたい」

今度は真由が不平を言う番だった。

「残念だけど、川魚は寄生虫がいるから、生は危険なのだよ」

加藤がうんざりした表情で真由に答えた。

「私が言っているのは、マグロのことよ。こんなんじゃないわ」

クーラボックスに入れられている残りの淡水魚を指差しながら、駄々をこねた。

「わかったよ。簡単なパスタ料理なら作れるよ」

アキラが加藤に助け舟を出した。自分のリュックサックから、スパゲッティを取り出して、空いている鍋

に水を入れて茹で始めた。十分足らずで、四人分のスパゲッティを茹で上げ、それまでにフライパンを使いオリーブオイルで、じっくりと炒めておいたニンニクとタカノツメに混ぜ合わせ軽く熱し、最後に塩・コショウで味を調えた。

「材料が無いんで、こんな物しかできないが我慢してくれ」

アキラは女達の皿にスパゲッティを盛っていく。

「こんなところで、美味しいペペロンチーノが食べられるなんて最高よ」

一口食べた美奈が、アキラに微笑みかけた。他の女達の評判も上々だ。彼女達は、焚き火の周りで携帯用の椅子に座り、アキラの作ったスパゲティに舌鼓を打っていた。

「俺達には無いのか？」

加藤が、物欲しそうにアキラの顔を見た。

「済まない。残りのパスタは彼女達用だ。あんた達にも何か作るよ」

アキラはクーラボックスに入っていたテラピアに似た淡水魚を取り出し、ナイフでぶつ切りにして、ニ

ンニクや唐辛子と一緒に厚手の鍋で炒めた。適当なところで水を加え、一煮立ちさせてから、カレー粉を入れ最後に塩コショウで味を調えた。辺りには香ばしいカレーの匂いが漂った。

「さあ、たっぷりと作ったから、好きなだけ食べてくれ」

企画部長の加藤、撮影担当の大杉、音声担当の高杉、雑用係の香織四名は、自分の皿に炊き立ての米とカレーを盛り付け、焚き火の周りに車座となり、夕食を取り始めた。

その時、村の男達五人が戻ってきた。

「どこに行っていたんだ？」

アキラが現地語で尋ねた。

「狩りに出たんだが、何も獲れなかった」

彼らの中で、最年長者と思われる長身の男が、焚き火を囲み夕食をとっている女達を見ながら答えた。彼はワジと名乗っていた。

「焼き魚や米で良かったら、食べてくれ」

アキラが言うと、礼も言わずに男達は、焼きあがった魚やハンゴウを持って焚き火から少し離れたとこ

ろに座り、無言のまま食事を始めた。
「何なの、礼も言わないで」
真由が、アキラの隣に立ち、腕組をして村の男達を睨み付けた。
「何か、不満でもあるのかも知れない。後で聞いておくよ」

一時間後、アキラは先に女達をツリーハウスに寝かせてから、撮影スタッフと村の男達を集めて、焚き火を取り囲み酒盛りを始めた。
アキラはウィスキーの水割りを皆に勧めた。
「明日から、撮影を始めるのか？」
アキラが隣に座った加藤に尋ねた。
「そうだ。あそこの滝をバックに女達のヌード撮影を行う予定だ」
加藤は暗闇にまぎれて、今は見えない滝の方角を指差した。
「撮影は三日間という予定だったな」
「ああ、予定ではそうだが、いい画が取れるまで粘りたい」

「それは約束が違う」
「当然、追加料金は支払うつもりだ。村の男達にも通訳してくれ」
アキラは、撮影が長引く可能性があり、追加の日当は支払うと言う内容を代表者のワジに伝えた。ワジは周りの仲間達に話の内容を伝えた。
「俺達は帰りたい。ここは危険だ」
「何かを見つけたのか？」
「森の悪魔が俺達のことをずっとつけている。あの女達を狙っているんだ」
「森の悪魔とはチンパンジーのことか？」
「そうだ。あいつ等は俺達を殺し、女達を連れて行く」
「どこにだ？何のために」
「あいつらは、群れから逸れたチンパンジーの集まりだ。ここ数年、開発のために森が焼かれ、住む場所を追われている。人に恨みを抱いているんだ。俺の村でも子供が浚われ食い殺されている」
「女達を浚って喰うと言うのか？」
「それだけじゃない。犯してから、食い殺す気だ」
「こっちには銃があるぞ」

「相手は、数十頭はいる。どこから襲ってくるか、俺達にも検討がつかない」
「アキラ。彼らは何て言っているんだ？」
加藤が横から口を出してきた。アキラはこれまで話した内容を掻い摘んで伝えた。
「チンパンジーが女達を浚って、犯してから食い殺すだって！何でエテコウが人間の女に欲情するんだ。有り得ない話だろう」
加藤が、両目を見開き、口から唾を飛ばした。
「人間だって、獣姦する奴だっているだろう？俺達を付けねらっている奴は、群れから追われた奴らだ。メスと長い間、交わっていないんだよ」
「どうでもいい。今、彼らに帰られたら、撮影はできない。あんただけで俺達を守りきれまい？」
「ああ、チンパンジーだけじゃなく、ライオンや毒蛇がいるからな。俺ひとりでは手に余る」
「ボーナスを払うって言ってくれ」
アキラはワジにボーナスのことを伝えた。ワジは再び、仲間にアキラの提案を伝えた。
「駄目だ。命には代えられない」

ワジが下を向いて首を横に振ってから、アキラの瞳をじっと見詰めてきた。
「どうしても帰るのか？」
「ひとつ、提案がある？」
「何だ」
「あの美しい女達を俺達の嫁にくれるなら、協力してもいい。命をかけるだけの価値はある」
「……そいつは無理な注文だ。俺達の国で女を売り買いするのは重大な犯罪なんだ」
「交渉決裂というわけだな。俺達は明日帰ることにする。あんた達も帰るつもりなら、連れて行ってやるよ」
ワジが立ち上がった。仲間の男達を連れてキャンプから少し離れた場所に移動して、新たな焚き火を熾こし始めた。

真由は夜更けに、異様な気配を感じ目覚めた。豆電球をつけただけの薄暗いテント内を見渡した。アキラの姿を求めたが、見当たらなかった。その頃、アキラは下で、加藤達と今後の方針について協議をしている最中だった。その時、テントの外に黒い大きな影が、

満月の光に浮かび上がった。
「アキラ。貴方なの？」
返事は無く、揺れ動いていた影がピタリと静止した。入り口に毛むくじゃらの腕が突き入れられるのが見えた。
「キャー！」
「どうしたんだ？」
アキラがライフル銃を背負い、凄まじい勢いで登ってきた。
「何かがいたのよ。毛むくじゃらの腕が、見えたの」
真由はアキラの分厚い胸板に顔を押し付け、嗚咽を漏らした。
「真由。大丈夫？」
他の女達も全員が目を覚ました。
「ちょっと待っていてくれ」
アキラは真由を里奈に任せて、テントから出た。周囲を懐中電灯で照らし出した。丸太で組んだ床に、獣のものと思われる黒い毛球を見つけた。
「加藤さん。俺は彼女達とここで寝るよ。何かあった

ら声をかけてくれ」
アキラは下にいるスタッフ達に向かって、声をかけた。
「俺達は誰が守ってくれるんだ？」
加藤が不安げな声を出した。
「焚き火を絶やさずにいろ。それからライフル銃をすぐに撃てる状態にしておくんだ」
それだけ言って、返事を待たずにアキラは女達がいるテントに戻った。
「もうここにはいないようだ」
一塊になって震えている女達に小さな声で言い聞かせた。
「アキラ。怖いわ。もう帰りたい」
真由が女達から離れ、アキラにしがみ付いてきた。
「撮影が終わらないと帰れないのよ。何のためにこんな辺境にきたわけ」
美奈が真由を振り向かせ、責めるように言った。
「今晩は俺が君達のことを守るから、安心して眠ってくれ」
「もう、この辺にはいないんでしょう？」

それまで黙って皆の会話を聞いていた里奈が立ち上がった。前に出てきてアキラのズボンに手をかけた。

「私、セックスしたら、よく眠れるの」

里奈の一言で女達の欲情が一気に燃え上がった。真由と里奈はアキラを奪い合うように押し倒し、シャツやズボンを脱がせた。全裸にむいたアキラに群がり、男根や睾丸をふたりで舐めた。

一方、美奈もエリを押し倒し、パジャマを脱がせにかかった。すぐに眩しいばかりの裸身が露にされた。むっちりとした太腿を押し広げ、膣口に口を付け激しい勢いで吸い始めた。

第三章　裏切り　へと続く